

NCS

No.53

自然・環境・人

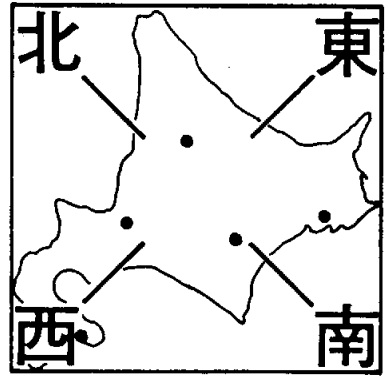
北海道自然保護協会会報
Nature Conservation Society of Hokkaido

1985年12月号



— 雪 深 く —

フォトグラファー 白河 康治



ノルウエーの 小さな旅

大石 武一



本年六月初旬、私達夫婦は娘と孫を伴って、大学同級の友人達とスカンディナビアの旅に出かけた。私はもともと、日程のせわしい団体旅行は好きではなかったが、気心の知り合った仲間と一緒に、ノルウエーの自然に強く惹かれて参加した。

私は久しい前の夏に、ノルウエー北部のラップランドを下ロムセまでフィヨルドに沿って歩いたことがある。道中はほとんど人影を見ることがなく、路傍には数々の野の花が濃いいろどりで咲きこぼれていた。雪の残る丘からは無数の流れが

海へ注ぎ、あるいは滝となっておちていた。フィヨルドは浮ぶ舟もなく、鏡の面のような静寂そのものであった。

ノルウエー中部のフィヨルドはまったくその面影を異にしていた。ラルダールから海に近づくにつれて、周囲の岩山は更に高く、絶壁が多くなって来た。私達はソグネフィヨルドを自指していたが、これは長さが一八〇キロもあるノルウエー最大のフィヨルドで、その一支流から観光船に乗った。船はせまい湾内をまがりくねってゆっくりと進んでいく。両側には絶壁がそびえ立ち、その高さは五、六〇〇メートルもあるうか、頭上のせまい空間には太陽は見えず、片側は暗くてよく判らないが、陽のあたる側の山貌や岩肌のすさまじさにはただ驚嘆するのみであった。頂上の近くから数百条の滝が岩壁をたたいて海面へたぎりおちていた。このフィヨルドはごくせまいが、海底は深く、八〇〇から一五〇〇メートルもあるそう、何十万年前に氷河に穿たれてつくられたが、どのようなメカニズムによるものか未だわからないという。私はいままでにこのようなきびしい雄大な景観に接したことはなかった。航行中の数時間はすっきり魂を魅了され、敬虔な思いで一杯であった。

ノルウエーは自然のすばらしい国である。国全体が固い岩盤で構成されているが、多くの樹木がよく生育している。もちろんうっそうとした大森林ではないが、針葉樹を中心によくこんなところにある岩山にも茂っている。この国では木材が輸出の大宗であることと合せ考えると、生態系を充分に考慮して伐採を行ない、自然を豊かに守っているであろう。わが国の無秩序な森林破壊と比べて、何

と人種がちがうことであろうと慨嘆せざるを得なかった。私達の通る道の両側にはいたるところに原っぱがあり、とりどりの野の花が咲きみだれ、花の筵をしまつめたような美しさだった。なかなかまどが多く、樹一杯に白い花をつけていた。どこへ行ってもゴミ屑や空缶は見られなかった。日本の団体が多かったが、日本人も清潔な環境の中ではこんなにマナーが良くなるものかと感心をした。バイキング料理はおいしかった。魚やえびの素朴な味がすばらしい。とくに、ベルゲンの魚市場の前で、紙袋一杯につめたゆで上げのえびを親娘四人でほぼばり合った楽しさは忘れられない。

(元環境庁長官・東京都在住)

一枚の木の葉

木村 訓文



函館山々頂から市街を見下ろして、そのまま視線を曳きずっていつて、ぶつかった山の奥に私のアトリエがある。道道赤川函館線が亀田川に接する部分、海拔百三〇メートル。窓を開くと細流が真近かに聞こえ、気持が洗われる。あたりは背丈よりずっと高いいたどりや萩、よもぎなどに覆われ原野と呼ぶにふさわしい。ここで制作をするようになって十年が経過したが、今も風景はあまり変わっていない。周辺をスケッチしながらよく歩きま

手稲山新スキー場計画の 現地を視察して

中野 徹三

(当協会常務理事)

十月六日、手稲山第二峯から札幌市街に向けて造成を計画された新しい大スキー場予定地を視察するために、三十数年ぶりに徒歩で手稲山に登る。昔は、軽川といった手稲の古い小学校の傍を通過して、細い小道を山頂に向ってゆっくり歩いたものだった。今回は、麓まで民家が押し寄せた西野から登る。一行は、協会の方は八木会長、紺谷理事と私の三人、案内してくれる地元の人、手稲山を守る西区市民の会」の方は、会世話人をされているピアニストの右近優氏、市の職員浅井伸男氏、北大大学院環境科学研究所の露崎史朗氏の三人、合計六人である。



間もなく、道の片側にガリィ(水でえぐられて生じた溝)が発生しているのに気付く。今年の夏に雨で生じた、という。

わが、その度に草木の新しい魅力を発見してよるこびにひたる。それらの樹々や草花は作品の中で重要な役割を演じて、私の小さな宇宙を支えてくれる。そればかりでなく、これまで観念的で思弁的な性格を持っていたのが私の作品の傾向であったが、ここで制作をするようになって、制作の方向と方法をかなり変えることとなったのも、この自然から受けた影響がかなり大きい。フォルムを決める場合など、自然を素朴な姿勢で視覚的にとらえようとする態度へと移行してきた。以前は多少試みていたデフォルメめいたことも近頃は必要を感じなくなってきたし、それ以上にどう描いても自然の葉っぱ一枚枯れ葉一枚の美しさの方が数等上

MY BOOK

「核の冬」(岩波新書)

M・ロワン

ロビンソン 著

高樓 堯 訳

発行/岩波書店 一九八五年

定価/四八〇円

太田嘉四夫

(元北海道大学教授)

私の本棚

この本は、地球上にこれまで寒冷がくり返してあり、人類にも何回かの危機があったらしい、ということを導入部として、今原爆や水爆を使用する戦争がはじまったならば、私たち人類の運命はどうなるだろうか、ということ、を、わかり易く説いている。現在貯えられている原爆や水爆を使って大規模な戦争がはじまると、地球上の気象の大変動が生じ、

等と思えてシャッポを脱ぐ。この花の美しさ、この実の美しさ、この木の美しさ、とても絵など描いていられないと絶望する。それでも描き続けてきたのは、自分の生きてあることの小さな証明と、それよりもなによりも、こんなにも美しいものを私たちに与えてくれている何者かへの大きな感謝の念の故だろうと、はつきり言う。どうにも感傷的で感情的だとは思うが。

それにしても、目に飛び込んでくる様々な自然破壊の現場とか情報に、私のこの素朴な感傷的自然観はひび割れてしまふ。ひとりひとりの隣人はこんなにも優しく善意に満ちているのに、人類という名のマスとして眺めると、途方もない狂

私たちがホモ・サピエンスという生物だけでなく、私たちが依存したり愛したりしている動物や植物もどうして生きていられないような状態が発生する可能性がある、というのだ。超大国が、それぞれの従属国を従えて核を使って戦争をはじめる。両国の指導者たちは宇宙船に乗って指揮をする。戦争が終った頃二つの宇宙船だけが、あてもなくぐるぐる、地球のまわりを飛びまわっている情景を想像してみよう。

まことに核兵器は、人類がこれまでに作り出した道具のうちで、最強で最悪のものだ。一体どうしてこんなものができたのであろうか。この本によると、一九三五年頃ドイツで働いていたハンガリー人学者レオ・シラードが原子爆弾の可能性について語ったが、誰にも相手にされなかつたそうだ。シラードはアメリカに亡命したがヒトラーが原爆を持つことを非常に心配していた。ところがフランスのジョリオ・キュリーは、連鎖反応についての発見の先取権を得ようと考えて、論文をイギリスの雑誌「ネーチャー」に送り、それが一九三九年三月一八日に出版されてしまつ

暴性を内にかくし持つ。権力とか被害者とか大国とか小国という形を超えて、人間が地球に棲息していることから生じているあらゆる身勝手さを呪う。そして自分自身がその人間のまぎれもないひとりであることのおぞましき。自然と人間の調和などということが果して可能なのかその疑問と解答がメービウスの帯のようにいつのまにやら表が裏となつている状態を考えて、茫然としてしまふ。人間は自らを名づけて英知ある存在であるという。地球そのものに向けてそれを美証できる日が来ることを、せつない思いで望んでいる。(洋画家・函館市在住)

た。幸いなことにドイツではハイゼンベルクらはヒトラーに原爆を持たせるべきではない、と考えていたようだし、ヒトラー自身もそういうものには興味をもっていなかった、という。

シラードはイタリーから亡命してきたフェルミを説得し、次にアインシュタインを説得してルーズベルト大統領に原爆を製造するようという手紙を出させた。日本軍の真珠湾攻撃の一日前、一九四一年一月六日に、ルーズベルトは原爆製造の命令を出したのである。それが成功するのはドイツ降服後だ。

もしも、ヒトラーや東条が先に原爆を持った、としたらどうなつていったらう。戦争では敵にまさる武器を持ちながら、それを使わずに負けてしまふなどという、間抜けな指導者はいないのだから。トルーマンが使おうとヒトラーが使おうと、核兵器は同じ威力を発揮する。

「よい戦争」などというものは無いのであるから、もうこのあたりで一切の戦争をやめにしてもらおう。

やがて、岩盤が露出して、きれいな板状節理が現われているところに来ると、八木会長が、これは溶岩がゆつくりと流れたことを示すものです、と丁寧に説明してくる。手稲山も昔は火山だったのか、とわかつて、あの優美な姿の由来が、はじめて納得ゆく。それにしても、表土は実に薄い。本州から来た露崎氏は、北海道の表土の発達は非常に遅く、だからごく薄い、と説明されたが、本当に樹々は、懸命に横に根を張って、この岩盤によも、よくこらえている感じだ。それにしては、ここにこんなにはばらばら紅葉があるとは！。何組もの親子が、楽しそうに登ってくる。ここは、住民の日頃の散歩道なのだ。麓から二時間ほど登ると、遙かに札幌市街を見下す尾根のすぐ下に、紅葉に蔽われた美しい沢がなだらかに続く。ここが、初級用コースになるのだそうだ。この沢が伐開されたら、表土の大規模な流失と水害の危険は、素人眼でも途方もなく増大しそうだ。そして、沢が裸になると、周辺の森林も、土壌流失で次第に衰えるに違いない。

第二巻のすぐ下の尾根は、ブルトナーでならされたが、手稲ハイランド、オリンピック、新スキー場はここで一点に会することになり、山の銀座となるだろう。だが、これではよいのだろうか。作家の加藤幸子さんは、本年八月に刊行された八木・辻井編「北海道自然と人」(築地書館)のなかで、手稲を歩いた感想を、「手稲無惨」という中見出しで、こう記している。

「要するに札幌市民のすべての人に親しまれていた手稲山は、開発のスケープゴートとして供されたのではないだろうか。このすさまじいほどの変貌によつて、さらに南西部にのびている自然破壊に歯止めがかけられるものなら、それも一つの方法である。……」

だが、加藤さん、残念ながらそうはなりません。一つの破壊は次の破壊を呼び、喚び止めるものは、人間の意志と行動でしかないのです。でも、若い日に次の歌詞を歌った人には、その頂きの破壊を、これ以上許せるのだろうか？

……羊群声なく牧舎に帰る
手稲の頂きたそがれ籠めぬ……



ESSAY

海岸を歩く

文・阿部 審也

海岸を歩く旅が続いている。
私の旅は、海をみながらひたすら歩く
独り旅である。

札幌に住んでまだ三年だが、その間は
主に道内の海岸をあちこち歩いた。一介
のサラリーマンだから、土日や有給休暇
をとっての短い旅である。地図を開き、
歩きやすそうな砂浜を探しては出かけて
いる。例へばサロベツ原野の水際、宗谷
からのオホーツク海沿い。

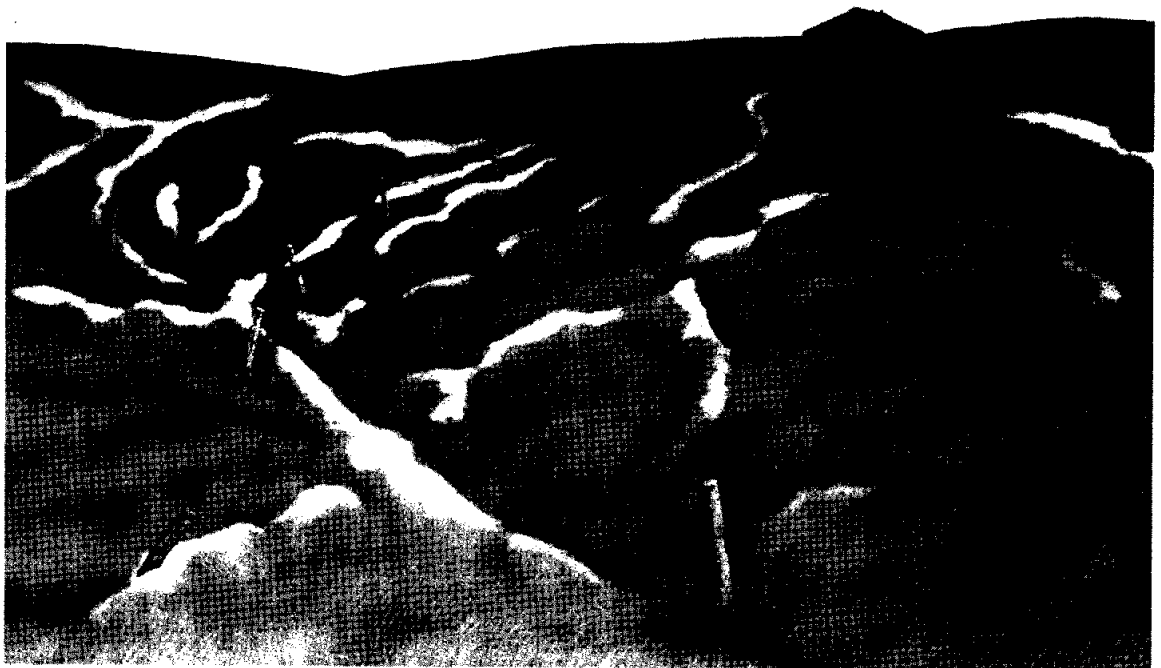
真夏のサロベツ原野では日射病で倒れ
てしまい、初冬のオホーツクでは吹雪の
中で立ち往生した。

北海道の天然はさすがに容赦がない。
なんとかなるといふ甘えが許されない。

本州の太平洋側、例えば鹿島灘、九十九
里浜、駿河湾、遠州灘、熊野灘などは、
どこで中断してもちよつと内陸側へ入れ
ばバスや鉄道で泊まれるところへ行ける
が、北海道ではそうはいかない。結果と
して、なんとかなっているものの、不安
になったり、真剣になったりしたことが
一再ならずある。

しかし、大体は、坦々とした海辺を歩
くだけのことである。海をみながら淡々と
歩いているだけである。コトは余り起
こらない。

砂浜、または海に最も近い道を歩くわ
けだから迷うことはないのだが、川があ
れば最初の橋まで遡らなければならず、
崖になったり道路が内陸側へカーブする
ことがあって、海としばらく別れること
がある。そういうときは最初の岐れ道で
また海岸に出ようとするのだが、いつの
間にか他人の敷地に入ったような、妙な
雰囲気の中を歩いていることがある。静
岡県の浜岡原発がそうであった。戻って、



「潮騒を聞きながら」 洋画家：鹿士 政春(道展会員・札幌市在住)

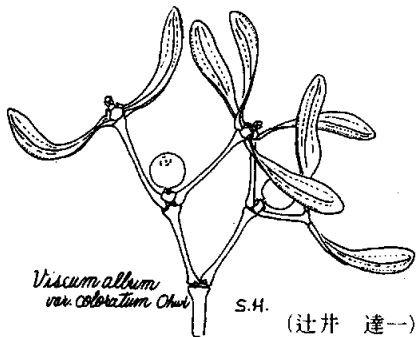
自然豆事典

クリスマスツリー・やどりぎ・門松

冬の、万物が死に絶えたようなさびしい景色の中で、あるいは白い雪の中で青々と繁る常緑の植物は、とくに生き生きとして鮮やかに映るために永遠に不変のものとか、特別な力が潜んでいるとかいうように考えられたらしい。ただそれを表わす形は民族によって異っている。クリスマスツリーは北ヨーロッパの樅（もみ）の木祭りとキリスト教信仰が結びついたものだし、同じように寄生木（やどりぎ）もクリスマス・デコレーションに用いられるがこれも古代ケルト族などの土俗的信仰の対象であった。アイヌ民族はトドマツの枝で悪魔・病魔を払い浄めたという。北ヨーロッパにもヨーロッパトウヒ（北海道では古くから輸入されて鉄道防雪林に広く用いられている）を葬式の時、墓地への道にその青枝を撒く習慣があった。北海道には育たないがヒマラヤスギはインド北方の山岳地帯で、レバノンシーダー（レバノン杉）はレバノン、シリア、イスラエルで古くから尊ばれた。日本の門松もまた、これに類するものといえるだろう。

たしかに冬のさ中に濃い緑をみるのは楽しい。ことに寄生木（やどりぎ）のように球形に付いたようなのは不思議がられたのもっともだ。デコレーション化されてもそれらは私たちに何か、自然の力といったようなものを感じさせてくれる。

クリスマスツリーや門松には若木、若枝が使われる。これには少し抵抗を感じる人も多いが、そのほとんどは間伐・間引き苗などだし、ヨーロッパではクリスマスツリー用に苗を多量に仕立てたものだ。しかし、立派に見えるのはやはり戸外に育った大木にデコレーションをほどこしたものだ。ロンドンのトラファルガー・スクエアに立てられるものは第2次大戦の援助のお礼にノルウエーから毎年贈られてくるものだというが残念ながらこれには無論、根はついていない。北海道の姉妹州カナダ・アルバータのエドモントン、隣りのサスカチワン州サスカワーンなどでは戸外のクリスマスツリー・デコレーションのコンテストがあるらしい。これも楽しいではないか。



Viscum album
var. coloratum Chui

S.H.

(辻井 達一)

大きく迂回させられた。三沢の基地がそうだった。戻ってバスに乗った。
海岸は誰のものでもない、すなわちみんなのものである、と思っていたが、そうではないのである。琵琶湖畔はホテルや大会社の保養所が柵を作って水際を歩けないようにしていた。熊野川の河口は工場敷地だった。
天然の要害であれば諦めがつく。かえって感心するぐらいのものである。しかし人工物によって海岸歩きを妨げられるのは自然人としてちよつと納得がいかない。砂浜を伝い歩きできるぐらいは道をつけておいた方がいいじゃないか。
北海道は、余りにも天然すぎるから橋や道路を作って歩けるようにしたら、と思うところがあるが、考えて、いやいや、このままのほうがいいと思うのである。知床半島や積丹半島は一周できなくて結構である。尾花岬も歩けなくて結構である。道路はもういい。生活道路だけ

確保して、観光道路はおしまいにしたほうがいい。そうすれば観光そのものが変わる。なんもない」という海岸があることの魅力―海岸を歩くこと自体が冒険または発見になることの素敵さ、そういう「観光」を私は北海道で味わっている。
海岸沿いに道路は通じているが、交通の便がないので歩かざるを得ないところがある。例えば、茂津多岬の米浜と瀬棚の間、渡島半島の小砂子と原口の間。前者はまだ歩いていないが、後者は僅か六キロ程であるが歩いたことがある。雄冬と千代志別の間も歩いたが、今はバスが通るので、ここでは小砂子・原口間のささやかな、何のこトも起こらなかった歩き旅のことを記してみよう。
江差からのバスの終点で降りた。辺りに何も無いところである。
埃の舞い立つ未完成道路だけだからかえって荒涼としている。

淋しさと不安とで、すぐ折り返そうとするバスの胴を叩き、戻るから乗せて下さい、といったいのを辛うじて抑えた。こうなれば、あとは歩くしかない。坂を登り断崖の上から海をみた。私人、そして海は私人のもの。両手を開いて海を抱き、海は応えて私を誘う。
天にも昇る心地というが、同じ意味で私は天から降る心地というのがあると思う。
海をみながら一歩一歩と歩く。道路はゆるやかに上り下りし、ときに鋭く曲がる。新しい橋があり、舗装された所もある。旧道にはすでに雑草が這い上がっている。そちらへ行きたい気持ちになるが、路肩が崩れている。行き止まりかもしれない。時々自動車が通る。振り返ると、後部座席の人も振り返っている。この道を歩く人は、まずいなさうだと、スケールの小さい自慢をする。やがて、平坦な地になる。道路が少し内側に寄る。海

との間に島があり、集落がある。そのほうへ向かう旧道は古くない。パイパスだろうとそちらに折れる。また一本道になる。ふとみると、いつの間にかこれほどの高みを歩いていたのだらうと思う断崖である。
比較しても意味はないが、石廊崎や足摺岬、能登の皆月、奥丹後の経ヶ崎等々どこに較べても、この単純、簡素にして人を峻拒するガケは見事である。幌武意から積丹岬にかけての、或いは有名な神威岬に匹敵する凄さを私は感じたのである。
読み進めるのが惜しい本があるものが、歩き惜しむ水際というのものもある。歩く旅だからそれがみえてくる。
「ほう」と声が出て、私はしばらくそこを動かなかった。それは歩く旅の自由と豊かさ加減を覚えるときでもあった。（エッセイスト・個人通信「妙」発行）

シマフクロウの危機

阿部 永

(北大農学部・社団法人北海道自然保護協会
エゾシマフクロウ給餌等事業検討会)



過去と現状

シマフクロウは北海道を中心として、中国東北部、シベリア沿海州、サハリン、千島などに分布する。フクロウとしては最大級の鳥である。ほぼ同大で、しばしば混同されることのあるワシミミズクがユーラシア大陸などに広く分布しているのに比べると、シマフクロウの地理的分布は非常にせまい。

大形捕食性動物の常として、この鳥も

雌雄のつがいの行動圏は非常に広く、つがいの間では排他的であるため、生息密度はきわめて低い。通常、川沿いなど、水辺になわばりを持つが、条件の良い所でも数千メートルごとに一つがいくつか隣りあって住んでおれば、この鳥の場合、高密度ということになる。アイヌの人々がこの鳥をコタンクルカ

ムイと呼び村の守り神として崇めてきたように、開拓前の北海道では、各地に広く分布していたようである。その当時は無数にあった水辺の巨木の樹洞に営巣し、豊富な生産量をもっていた原始河川や湖などの魚類をはじめ、陸上の中小動物を主食とするように適応したのがこのフクロウである。したがって、この鳥の主要な生息地は海岸、湖畔のほか、平野部を流れる大きな川の河畔である。いうまでもなく、正にこの鳥の主要な生息地となるような所は、通常最も早く開発される所であり、まずそれによって営巣木や餌動物の生息地が消失して行った。そのため、北海道の大半の平野部では、すでに第二次大戦前までに、その生息地は失われ、このフクロウの定住もみられなくなっていた。戦後まで、平野部の森林と河川が比較的良好な状態で残されていたのは、根釧地方だけであり、この地方が近年の北海道におけるこのフクロウの主要な生息地であるのはこのような原因によるものである。しかし、昭和30年代以降の根釧地方における大規模森林伐採と草地化により、このフクロウの生息環境は急速に縮小化しており、わずかに残された繁殖地においても、細々と命脈をつないでいるというのが現状である。

現在、北海道におけるこのフクロウの分布は、日高から大雪山系にかけての中央山地から、知床、根室にかけての東半部に片寄っている。そして生息の情報があるのはわずかに10数箇所であり、最悪の場合、生息数は40羽に満たない可能性が高い。これは北海道におけるタンチョウの生息数の最低時のものに近く、個体

群の遺伝的構成などを考慮すると、危機的状況にあるといわざるを得ない。

更に進む退行

道東域に残ったわずかの生息地においても、このフクロウにとつての環境悪化は着実に進行している。生息地あるいは営巣地に近接した所まで、森林が伐採されて牧草地となり、また、本来このフクロウの冬期における主要な採食場であった、わずかの不凍水面(湧水地など)の多くは養魚場として占拠され、さらにここでは魚の捕食を防ぐために張られた網や、仕かけられたトラバサミによって、わずかに残ったシマフクロウがしばしば犠牲になっている。

道東の平野部の河川流域にすむシマフクロウの生息環境は、広大な牧草地に囲まれた川沿いのわずかに残された葎状の林だけであり、ノウサギやエゾライチョウなど、陸上の餌動物が生息できる条件は少なく、一層魚類だけに食物の大部分を依存せざるを得なくなっている。

北国の多くの野生動物がそうであるように、このフクロウも、秋には通常の2倍程も餌をとり、体内に栄養蓄積を行って冬を迎える。かつては秋に大量のサケが川を溯上したので、それらはこの鳥にとつても必要栄養量を満たすための重要な資源であったに違いない。しかし、現在では河口においてすべての魚が捕獲され、また砂防ダムによって魚の溯上がほぼ完全に断ち切られてしまったので、その影響を最も強く受けたのは魚食性の強いこのフクロウであろう。

このようにして、不十分な餌条件のまま冬に向かった個体、特にその年生まれ

の若齢個体の生存率が悪くなることは容易に想像できることである。このフクロウの若鳥の生存率に関する正確なデータはまだないが、この種の鳥では、巣立ち後最初の冬を越して生き残る確率は30〜40%もあれば良い方ではなからうか？この種の鳥は同じ個体が毎年繁殖するとは限らず、また、諸条件から考えると繁殖成功率も決して高くないと思われる。そこで、毎年北海道内で巣立ちする若鳥を、仮りに最大7〜8羽と見積つた場合、そのうち繁殖年齢(正確には不明、3年で成熟という説もある)に達するまで生き残れる個体はきわめて少なくなり、1年に1〜2羽もあるであろうか。この種の大形のフクロウは、成体に達した後

の寿命が比較的長いので、現在の生息状況から考えると、若鳥の生存率は更に小さいものである可能性がある。

以上のようなことから、分布の中心と考えられる道東域においても、繁殖個体群へ参入できる若鳥は非常に少ないものと考えられ、それが親鳥の死亡を補ってこの地域における現状の生息数を維持できるほどに達しているかどうかさえも疑わしい。少なくとも、現状の生息域を拡張、新しい繁殖地を作れるほどに若鳥が生産されていないことは確かであろう。その一つの証拠として、現在、北海道内の分布の周辺にあたる大雪山系の河川流域において、そこに永年生息してきた個体が、過去数年の間につがいの一方が欠けた後、何年にもわたって新しいつがい形成ができないでいるもの一つならずある。このことは、分布周辺域であるこの地域への補充個体の分散ができ

ていないことを示すものである。野生動物が絶滅に向うとき、このように分布の周辺からその縮小が起るのが普通であり、過去数年の状況は、このフクロウがトキやコウノトリと同様の道をたどりつつあることを示すものである。

もう一つの問題

以上のように、北海道におけるシマフクロウの生息環境や生息数の現状はきわめて悪い状態になっているが、それにもかかわらず、いやそれだからこそ、珍しいということでのニュース性から、写真撮影や安易な報道が行なわれ、そのことがこの鳥の生息や繁殖条件を更に悪化させるということが起っている。

ある出版社からでたシマフクロウの写真集がある。それには道東でとらえたこの鳥の営巣木や巣卵、ヒナの成長段階を追った見事な写真がのせられ、それは確かに一見すばらしい記録写真になっている。しかし、これだけの写真が撮られた時の情景を思いめぐらしてみれば容易にわかるとおり、撮影者は頻りに営巣木に接近し、大木に登り、卵やヒナの写真を撮るといふことで著しい繁殖妨害をしたことは明らかである。これには樹上にとまる親鳥や、採餌の写真を撮ったものとは全く異つた意味がある。事実、この近辺には、今でも親鳥がいるにもかかわらず、この写真に撮られた巣はその後放棄され、現在に至るまでこの地域では繁殖が確認されていない。この本には、他にすばらしい写真や記事が含まれているにもかかわらず、この事実を知らない一般読者に対して、この写真集を良書として推薦できないのは、この部分があるため

である。

道央のある所でアマチュアの人によって撮られたこのフクロウのビデオをあるテレビ局が放映した。これは特に他意があつてのことではなく、単に珍しいということだけで紹介したものであろうが、その放映後、アマチュアのカメラマン等がその場所に殺到し、シマフクロウを追いまわすということが起つた。この場所は、前述のような道内におけるこの鳥の分布周辺に位置し、つがいの片方が欠けた個体の生息地である。すでに全く個体がいなくなつてしまつた隣りの生息地に次いで、正に消滅の危機にあるこの分布地において、最後に生き残つているのがこの個体である。この事件は、安易に、単にニュース性だけから報道された結果もたらされたもので、その結果への配慮が全くなされなかつたところに問題がある。

更に、ある新聞に報道されたシマフクロウのヒナの写真と記事では、撮影のためヒナに接近したとき、飛べないヒナが地上に落下したことが明記されていた。他の多くのフクロウ類と同様、このフクロウのヒナも、また飛べないうちに巣立してしまふ。そのため、この時期に撮影者が接近すれば、ヒナは逃げようとして飛び立ち、地上に落下せざるを得ないわけである。地上に落下したり、灌木などの低所に下りたヒナは、キツネなど、捕食者の犠牲になる率が非常に高くなる。一般に、人に発見された野鳥の卵やヒナの死亡率が著しく高くなるのは、発見者が草の中につつた踏分け道が、キツネなど捕食者の誘導路となり、それらに発見

され易くなるためである。したがって、この写真撮影はその報道の意図に反して、このフクロウにとつては最も危険なことであつたに違いない。

一般に報道機関や出版社がこの種の自然ものの記事や映像を報道する場合、初めての記録”とか”珍しい”などで、ニュース性だけから判断され、報道後の結果への配慮に欠けるか、あるいは人間社会の記事に比してそれが著しく弱い。更に、生息写真などは、わが社が報道しなくても他社に持込まれる、あるいは他社がやるという、単なる記事採取の競争だけが優先され、そのニュース採取の過程や結果を省みないことが頻りに起つている。また、そのような写真や記事を買う所があるため、競つて稀少なものを撮るといふ部分があることも事実である。ワシントン条約違反で各種の貴重な野生動物やその標本が日本に輸入され、それが自然破壊につながるとして非難を受けていることが同じメディアで報道される。しかし、全く同じような結果をもたらす上述のようなことを、日本国内の記事報道の背後で、一部の報道機関や自然保護を標榜する出版社が行つていることは見逃せないことであろう。

このような貴重な野生生物の保護における保護意識の啓蒙に際しては、その生物そのものの存在や状態が、一般の人々によく理解されるための正確な情報の提供が望ましい。しかし、残念ながら現状では、そうすることが右の例のようなマインナス要因になり得るので、この点は現在における最大のジレンマである。またこのジレンマは、その物の稀少性が高い

ほど大きいというやつかいなものであり、管理の難しい稀少生物のもつ宿命でもある。このフクロウに関して、タンチョウに対すると同じような、保護に関する一般認識が形成されるまでには、まだ年月を要すると思われる。しかし、これが形成された時にはフクロウそのものが絶滅していたということがないよう、報道のあり方への配慮を関係機関にお願いしたいものである。

保護、何故保護か

野生動物の保護をいう場合、常にこの何故保護かという問題がつきまとう。ここでは、一般にいわれているような理由以外、特別なものがあるわけではないが、以下に簡単に述べておきたい。

まず、このフクロウが北海道の魚類群集の中において、食物連鎖の上位に位置する歴史的、進化的自然物であるということである。このような、北海道の自然を特徴づける、われわれ人間によつては再生産のできない一つの象徴的遺産を、次世代に残すことなく、現在のわれわれだけでくいつぶしてよいとは誰もいえないであろう。保護の基本的理由はこれにつきるもので、他の理由は派生的なものである。例えば、この鳥のような食物連鎖の上位に位置する動物種が生存できるためには、下位の数多くの生物種が生存できているということの意味することから、良好環境の標徴種としてそれが重視される。しかし、これもよい環境を残すということ、上述のことに付随するものである。

国の天然記念物に指定されているシマフクロウにしても、また土着のオジロフ

シにしても、人間の諸活動と大きく競合して生活せざるを得ないものでは、右の理由で保護することをきめた以上、何らかの援助手段を講じなければならぬ。

餌資源の最少期となる冬期においてはこれら大型鳥類のうち、オジロフは湖の氷下漁や沿岸漁業に、また、シマフクロウの多くは、養魚場の魚に依存せざるを得ない。後者の場合、前述のように、冬期におけるわずかに残された湧水地の多くが養魚場として占拠されているので、その利用を不可能にするということは、このフクロウの生存を否定するのと同じである。このフクロウにとつて、特に冬期における最小限の餌の確保は、人為的な援助なしにはもはや不可能な状況にまで追いこまれていくことは確かである。

タンチョウの生息数は、昭和30年代以降、この30年間に約10倍の増加をみせたが、その最大の理由は、冬の給餌による冬期の死亡の低下が大きく貢献したことであろう。タンチョウのような集合性がなく、また、一年中強い動物食性を維持しているこのフクロウの給餌には、まだその手法において多くの未解決の問題を残しているが、早急に効果的な方法の開発が必要である。

また、少なくとも知床などの河川では、その河川がもつサケ類の自然産卵の容量を、充分使いきるだけのサケを湖上させるべきであると思う。そうすればこのフクロウを含めた野生動物にもはかり知れない良い影響がもたらされるものと思うからである。自然河川のもつ生産力を全く使わず、人工孵化だけを行うことは、二重いや他の野生動物保護への波及効果

を考えた場合、三重の浪費であるといわざるを得ない。更に加えて、後述のようなこのフクロウの保護のための給餌費用を、別に用意しなければならぬということも考えると、その不当性の程度がわかるというものである。

サケの人工孵化技術がこれほど向上しその孵化放流には莫大な国費が使われてきたわけであり、また、その生産物から一部の漁業者だけが莫大な大きな利益を得ていることを合せて考えるとき、このような浪費を続けることは、納税者の一人として、私は耐えがたいものを感じざるを得ない。少なくとも、河川へのサケの湖上、自然産卵による河川の適正利用を関係機関に望みたいものである。

保護案の実行

このフクロウにおける以上のような状

シマフクロウの保護増殖事業をめぐる

片岡 秀郎（社団法人北海道自然保護協会）

一、経過

シマフクロウは、明治年間には、道内各地のサケ・マス湖上河川の流域や湖沼一帯に広く分布していたと語られている。しかし、その後、森林開発による営巣用の大径木の消失、餌となる哺乳類や鳥類の減少、また、河川改修、治山治水事業に伴い餌場である河川環境の悪化、サケ・マス増殖事業の進展による湖上サケ・マスの全面捕獲など生息環境は急速に悪

化し、すでに昭和四十年代には幻の鳥と
呼ばれるまでになつてゐる。

シマフクロウに関する過去の調査例は
大変少なく、道東全域にわたる生息状況
や個体数についての調査は、北海道教育
委員会により、昭和五十年、五十一年に
実施されているだけである。それによる
と二十九羽が確認されているにすぎない。

また、昭和五十六年に環境庁により実施
された調査では、期間が短かつたこと
もあるが、確認できたのは僅か五羽であ
つた。両調査とも全個体数を把握したも
のではないが、シマフクロウの個体数は
極めて少なくなつてゐる。

また、餌が十分でないことから、人家
近くへの飛来や養魚施設への飛来をまね
き、事故を誘発しており、この十年間に
十数羽が死亡・収容されるなど、生息環
境の悪化がシマフクロウの減少にさらに
拍車をかけている状態で、第二のトキに
なるのではないかと危惧されている。

このような状況の中で、昭和五十九年
度より緊急保護対策がとられたものであ
る。

二、事業概要

当該事業は巣箱の設置及び給餌により、
エゾシマフクロウの保護増殖を図ろうと
するもので、これを推進する体制として、
協会内にエゾシマフクロウ給餌等事業検
討会を設置し、事業を行った。

委員は、阿部 水、川辺百樹、小柳慶
吾、近藤憲久、高田 勝、中川 元、永
田洋平、橋本正雄、藤巻裕蔵、山本純郎、
浦坂周一の各氏である。(アイウエオ順)
昭和五十九年度の事業概要は次のとお
りである。



○巣箱の取付け風景

(一) 巣箱の設置

巣箱の設置にあたっては、次の点が考
慮された。①シマフクロウが利用してい
る天然樹洞の大きさ、形状。②鋤路動物
園で使用している巣箱の形状。③根室地
方すでに架設している巣箱の形状。④
架設場所が大木の上で作業上非常に危険
を伴うため、必要最小限の大きさに作る
必要があること。以上の点を考慮して、
木製の巣箱九基と、軽量で耐久性のある
強化プラスチック製の巣箱七基を架設し
た。また、大径木の洞で、過去に営巣が
あったものなどで、現在樹洞の底が抜け
るなど老朽化が進んでいるものの補修を
三箇所行った。

(二) 給餌

給餌にあたっては、次の点が考慮され
た。①ペリット分析結果による食性。②
管理しやすい給餌の形態。③採食環境の

改善をはかる給餌の形態。④根室地方で
行われていた給餌の形態。以上の点を考
慮し、次の五つの方法を試みた。

①サケ・マスの放流

捕獲サケ・マスの一部を河川へ放流し、
採食環境の改善をはかるもので、水産庁
さけ・ますふ化場、さけ・ます増殖協会、
地元漁協の協力をえて二河川で行った。

②生簀による給餌

湧き水を取りこむ素掘りの生簀に魚を
放流し、一箇所で行った。

③生餌用籠による給餌

囲いでエゾヤチネズミを飼育し、捕食
できるようにしたもので、一箇所で行っ
た。

④給餌台による給餌

採食場としてゐる地点、一箇所におい
て給食台に置餌をして行った。

⑤モモンガ巣箱の架設

採食が確認され、同じ夜行性のモモン
ガ用巣箱を集団的に架設し、その生息密
度を高め、採食環境の改善をはかる試み
で、二箇所で行った。

(三) 結果

巣箱については、木製巣箱一箇所で、
二羽のヒナのふ化を確認した。このうち
一羽は巣立ち前に何等かの原因で死亡し
たが、一羽は巣立ちした。この幼鳥には
標識をつけ、観察を行っている。

また、プラスチック製巣箱一箇所では、
巣立ち前のヒナの死体を確認し、巣箱の
利用が明らかになった。

給餌については、サケ・マスの放流は
放流河川で捕獲が目撃されており、一定
の効果があつたものと推測される。給餌
台による給餌は、従前の継承であり、採

食を確認できた。他の方法については、
効果を確認するには到らなかった。

このことから、営巣環境が悪化してい
る地域においては、人工的な巣箱で補完
していく方法が有効であることが明らか
になった。いくつかの検討すべき点が残
されてはゐるものの、巣箱については一
応の目処がついたと考えられている。

給餌については、幾つかの方法が試み
られたが、今後、冬期間における適切な
給餌方法の開発が急がれている。

(四) 幾つかの課題

シマフクロウの保護増殖事業を通して
幾つかの課題が指摘された。(一)及び(二)
については、阿部 永氏が詳細にふれてい
るが、各項目をあげると次のとおりである。
(一) 漁業や増殖事業と調整をはかりつつ、
河川へのサケ・マスの溯上が推進され
ること。

(二) 護岸や治山・治水ダム本来の機能を
維持しつつ、魚類の生息環境の悪化を
招かないような河川管理技術が早期に
開発されること。

当面、魚道の整備及び魚道維持管理
の徹底がはかられること。

(三) シマフクロウの撮影、観察、出版、
報道等に関して、より強い倫理的自己
規制がはかられること。

(四) 文化財保護法第八十条第一項、鳥獣
保護法第八條の八第五項の規定等の積
極的な運用により、繁殖地への立入規
制等の規制の強化がはかられること。

(五) シマフクロウの保護に関して連絡調
整をはかるため、関係機関による連絡
会あるいは協議会が設けられること。

自然は人の行動に正直 森林そのものが教育の場

谷 昌恒 (北海道家庭学校校長)

インタビュー：紺谷 友昭 (当協会理事)



自然と人

遠軽町にある北海道家庭学校は日本で唯一の私立男子教養院。牧師、社会事業家の留岡幸助氏(一八六四—一九三四)が教育によって犯罪の根を断とうと一九一四年開設した。すでに千五百人がこから巣立っている。四百ヘクタールの学校林は見事に管理されて美しく、北海道自然百選の一つにも選ばれた。現在の校長は谷昌恒氏(六三)。教育者としてはもちろん、キリスト教の信仰と広い教養に支えられた文章で全国的に知られている。

Q 東京に生まれ、東大で地質学を専攻された先生が家庭学校の校長になられたのは？

谷 一九四五年、私が敗戦の年をむかえたのは鹿児島島の鹿屋というところでした。大学の特別研究生としてセメントの原料をさがしていたのです。戦争では在学中の文科系学生までが召集されて空や海に散ってしまいました。私は理科学者として召集されずに生き残ったことに深い負い目を感じました。

鹿屋では私の親類がライ病院の職員をしていました。戦争中はその病院の患者までが、「国のためになる」と喜んで防空壕を掘っていたのです。私は科学研究をやめ、そのライ病院で働くことを申し出ました。しかし親類からは「若い人間のすることではない。子供のことをするのが向いているのではないか」と断られました。九州からの帰途、大阪の駅で被災孤児に助けを求められました。助けを求めている私に助けを求める人がいることを救われたように思い、福島県の堀川愛生園で被災孤児をひきとって育てる仕事を始めました。孤児もいなくなつた一九六五年からは東京の社会福祉研究所で現場の経験のある人間として社会福祉の主任研究員をしています。その研究所には家庭学校の創設者の四男で四代目校長の留岡清男先生が教育学者としてよく来ていました。先生は単にキリスト者であるだけでなく教育の実務をよく達成できる後継者を求めていました。私が五代目の校長として家庭学校をあずかることになったのは一九六九年です。

Q 家庭学校の豊かな自然が子供たちに与える影響はどのようなものでしょうか？

谷 少年の非行は激しい行動をとまなつています。少年のあふれるようなエネルギーを健康な形で発現させることが大切なのです。少年たちにこれだけ広い自然が与えられているとエネルギーを十分に燃焼させることができず、森林、牧場、野菜畑、水道、道路、建物、果樹園の仕事にミルクしぼりや味噌づくりになど限りなくある仕事を職員が先頭になつて取り組み子供たちがそれを追いかける形で働いています。職員が自然を舞台に子供たちを教えるのではなく、職員と子供たちがいっしょになつて自然と格闘するのです。このような厳しさのある対象でなければ人は成長できないのです。

自然は人の行動に対して正直であり、まちがった行動は必ず悪い結果となつて現われます。子供たちは四十年前の子供たちが植えたカラマツを用材とし、三年前に仕込んだ味噌をいま食べています。ここでは本当の意味での伝承を実感として学ぶことができます。

Q 少年たちの指導に当って心がけていることは何でしょうか？

谷 人は罰すれば罰するほど悪くなります。なにかに熱中させること、それも生産の過程に参加させて物を作る喜びを覚えさせることが大切です。物を作ることに熱中する人は悪いことから脱け出すのです。シンナーを吸っていた子に種子をまかせたことがありました。十日ほどたつて出てきた芽をみたときの喜びようはありませんでした。その子はその時からこの生活にとけ込むようになりました。

Q 現代の子供たちをみていて特に感じられることは？

谷 なにに対しても受身であるという生活態度が一般的です。何かを能動的に行うという訓練、特に人と人がふれ合つて生きて行く訓練が圧倒的に欠けています。ここでは前からいた子に新入の子の指導をさせますが、親がわりになつた子は心がわかに安定します。

Q せっかく家庭学校を出ても少年を迎える

側が元のままとするのは残念なことですね。

谷 良い習慣を身につけて行つても昔の仲間が放埒な姿でいるのをみると士気が阻害するようです。一時的に家に帰つてきた子が両親の毎日争う姿をみて、「おれの家なんか家庭でないよ。ここにくるとホッとする」ということもあります。しかし、そのような子も親を裁くようにみるのではなく、その親もつまづきながら生きていくことを理解するようになると態度が変わつてきます。子供が親をやさしい目でみるようになると親もまた変わつてくるのです。

Q それにしても家庭学校の森林はよく手入れされて美しいですね。心に安らぎを覚えさせる風景です。

谷 四年前に林内に二十四キロの作業道が完成してから手入れがよくできるようになりました。学校の開設以来、どんなに苦しくても木を切らなかつたからこれほどの森林になつたのです。創立者もわれわれも木を切つて教室を作るよりも木々そのものが教育の場だと考えているのです。後代に木をこの精神は教育をさかんにする精神と同じなのです。この前、卒業生の実業家が数十年前ぶりに訪ねてきました。心の中の森林はそのままだった。自分を支えてきたのはこの森林だった」と話していました。

この森林は沢山の野鳥が訪れるほか、シカ、キツネ、リスも多いのです。このごろはどういうわけかカラスがしきりにリスを追いかけるのが目につきます。

このあと谷校長は「この眺めはきれいでしよう」といいますが「れしそ」に林内を案内してくれた。林は下草やツルが刈られて整然としており、木々の間の地面は初冬でも鮮やかな緑のコケでおおわれている。

林の間の農場や牧場からは野菜や果実、ミルクやバターがもたらされる。泉からは水道がひかれてくる。歩きながら谷校長は「現代では頼つても得られない至福の生活です」と話していた。



協会の活動

(会場記載のないものは
事務所で実施・敬称略)

○昭和六十年九月二十五日(水)
懇談会『定款・諸規程の改正について』
参加者 在札幌理事七名

○十月六日(日)

自然観察会『並木散歩』

場所 札幌市街

講師 村野紀雄

参加者 二十五名

○十月七日(月)

第五回常務理事会
主な議題

一、六十年度上半期事業報告、決算報告及び
下半期事業見込、決算見込の件

二、会誌の今後の方針の件

三、手稲山スキー場計画の件

○十月二十六日(土)

会場 札幌市青少年センター

主な議題

一、六十年度上半期事業報告、決算報告及び
下半期事業見込、決算見込の件

二、新入会員承認の件

三、会誌の今後の方針の件

四、手稲山スキー場計画の件

○十一月十日(日)

自然観察会『森の野鳥をたずねて』

場所 野幌森林公園

講師 柳沢信雄

参加者 三十名

○十一月十五日(金)

講演と音楽の夕べ

主催 当協会、道新

会場 札幌、道新A・B会議室
音楽 キター弾き語り『大空を飛べ』他
森田まさはる
講演 『砂漠は生きていた』 高田 勝
参加者 八十七名

ツル保護募金へ

ご協力を!



財・日本野鳥の会・ツル保護特別委員会では、タンチョウをはじめ野生のツルを守るための活動資金を募っています。

皆様のご助力をお願いいたします。

なお、募金された方には、日本野鳥の会よりツルの絵ハガキが送られます。

また、一万円以上の寄付は、所得控除の対象になります。

ご寄付の送り先

郵便振替口座 東京〇一二四八九四

加入者名/ツル保護特別委員会

ご照会先/日本野鳥の会・ツル保護特別委員会 東京都渋谷区渋谷

一―一四青山フラワービル五階

電話〇三―四〇六一七二四一

LOOK-IN

講演「砂漠は生きていた」を聞いて

柳沢 信雄

高田勝氏の講演と聞いて兎に角出席することにした。今までに数冊ではあるが氏の著書を拝読し、氏の生きざまと機知に富んだ文に魅せられていたので、底抜けに明かるく、楽しい話を期待して会場に入った。

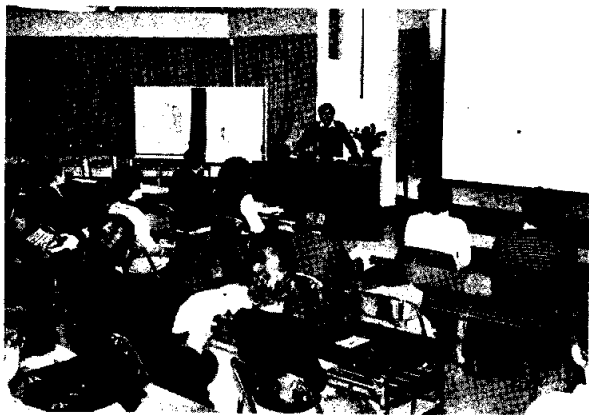
砂漠を訪ねてアメリカに行つて来たというのも面白い。砂漠と聞くと普通はアフリカ大陸が頭に浮かび、アジア、オーストラリアと続き、アメリカの砂漠はなかなか思いつくものではない。折角アメリカまで行つて砂漠だけに的をしぼる事も並みの人に出ることはない。

氏の目的を持った相当期間の体験旅行からの話には深く感動し、強い感銘を受けた。

私達の頭の中の砂漠は、乾ききつた死んだ大地だったが、氏の話から生きている草や木、思っていたよりたくさん動物の生活が紹介された。

しかも、アメリカ砂漠の成り立ちから、地形・地質、気候、産業、動植物の分布等、幅広い視野から整理し、順序立て、大変内容の濃い質の高い講演となりびっくりした。

氏の著書から受けていた、軽妙でウィットに富んだ話を予想していた私には、真面目な顔で真面目な話をする氏に、すっかりめんくらってしまった。



戸惑いながらも話が進むにつれて、だんだんにひきこまれ、アツという間の二時間でした。

気がついてみると、メモも満足に残っていないありさま、地名や動植物名は耳新しいものばかりで後悔した。

しかし、あの素晴らしいスライドを生かした立派な旅行記「砂漠は生きていた」が必ず出版されると確信している。

(札幌市立豊滝小学校校長・札幌在住)

寄贈図書

- 『パタゴニア自然紀行』 (敬称略) 朝日新聞社寄贈・松井寛進
- 『写真集・北海道の山々』 (湊 正雄監修) 北海道撮影社寄贈・同上
- 『紅の戦士たち』 (ロバート・ハンター著、瀧脇耕一訳) 社会思想社寄贈・瀧脇耕一
- 『湿原の画家・佐々木栄松作品集』 (佐々木栄松) 四海書房寄贈・佐々木栄松
- 『地下資源調査所報告・第57号』 北海道立地下資源調査所寄贈・同上
- 『北海道の地熱・温泉、一九八五年I版・II版』 北海道立地下資源調査所寄贈・同上
- 『日高山脈の地形・地質』 北海道自然保護連合寄贈・同上
- 『秋田県のごミムシ類』 (笠原須磨生) 秋田自然史研究会寄贈・同上
- 『知床半島、自然と生き物たち』 人と自然の会寄贈・同上
- 『所蔵資料目録、鳥類・哺乳類、植物その1』 斜里町立知床博物館寄贈・同上
- 『知床博物館研究報告、第一、三、三六集』 斜里町立知床博物館寄贈・同上
- 『日本の鳥類保護の変遷』 (井上元則) 鳥獣行政別刷寄贈・井上元則
- 『捕鯨問題にみる理科と文科』 (藤原英司) 朝日ジャーナル複製寄贈・著者
- 『斜里町郷土研究、第九号』 斜里町郷土研究寄贈・同上

- 『Nature Conservation Administration in Japan』 環境庁寄贈・八木健三
- 『PROTECT NATURE』 ソ連寄贈・八木健三
- 『北海道高等植物目録I、シダ植物・裸子植物』 (伊藤浩司他) たくぎん総合研究所寄贈・同上

★新刊紹介★

『パタゴニア自然紀行』氷河調査隊 同行記
松井寛進著
発行/朝日新聞社 一九八五年
定価/一、一〇〇円

松井さんは地球最後の極地パタゴニアへの北大・京大等連合の第五次調査隊にジャーナリストとして参加した。特別の専門テーマはないので、自由に自然全般―氷河や気象、動物や植物にひろく目がくばられ、全体の鳥瞰図的な知識を得るのにたいへん都合だ。またジャーナリストの感覚で日本人とは対照的なチリ人の生きざまを、さまざまなおエピソードと共にいきいきと描いているのが興味深い。「いつか一度いつてみたい」が本書の読後感だった。

(八木健三)



「環境アセスメントの復権」

―21世紀の環境づくりのために―

日本科学者会議編
発行/北海道大学図書刊行会一九八五年
定価/一、五〇〇円

鳴りもの入りで宣伝された環境アセスメント法案が、財界や自民党の反対であえなく葬られ危機感をよぶ今日、日本科学者会議は環境アセスメントの科学性と現実―シンポジウムの成果の上に本書を刊行した。第一部では道路、発電所、ダム等多数の実例の上に免罪符化したアセスの現状を鋭くつき、第二部では環境を守るためにあるべき真のアセスの創造をつよく訴えている。とくに住民運動家や調査に関与する科学者、技術者の熟読を希望する。

(八木健三)

「自然保護のあゆみ」

日本自然保護協会編
発行/日本自然保護協会 一九八五年
定価/三、〇〇〇円

日本の自然保護運動は尾瀬から始まったが、雌阿寒岳頂上の硫黄採掘を契機に日本自然保護協会が創立されてから一九八二年で三〇年がたつ。本書はその三〇周年記念に同協会の活動を主軸にすえ、わが国全体における自然保護運動の流れをまとめたものであつて、固い内容を「証言」などにより読みやすくする工夫もこらされている。終りには「年表」と「資料」とがまとめられ、わが国全体の自然保護の歴史を把握するには絶好の書である。

(八木健三)

『北海道高等植物目録・第一巻・シダ植物・裸子植物』

伊藤浩司・日野間彰・たぐぎん総合研究所共編
発行/たぐぎん総合研究所 一九八五年
定価/二、〇〇〇円

本書は①北海道に分布する植物を網羅、②和名、学名の対照表の大成、③すべての北海道産高等植物のコーディング(番号づけ)の

初の試みを特色として企画されたものである。植物研究者、同好者をはじめ、環境調査、アセスメントにたずさる方にとつて、座右の必須の基礎資料といえよう。以下、単子葉編、離弁花編、合弁花編が続刊される。

「湿原の画家・佐々木栄松作品集」

佐々木栄松著

発行/四海書房 一九八五年
定価/五、〇〇〇円

創路にあつて孤高の活動をつづける「湿原の画家」佐々木さんの画は、あるときは真紅に燃え、あるときは紺青に沈み、私たちを湿原のファンタジーに深くひきこむ。湿原に住み、湿原を愛した佐々木さんにしてはじめて到達した画境である。三十九のカラー作品と十三のモノクローム作品を収めた本書で人びとは湿原の美しさに感嘆を惜まないであろう。また湿原をめぐるエピソードを描いた随筆「絵と文」もよくなたのしい。(八木健三)



昭和六十年十二月十八日発行

〇六〇 札幌市中央区北一条西七丁目
弘井ビル五階

発行所 社団法人北海道自然保護協会

電話 (〇一一) 二六一六五八六代

(〇一一) 二五二五四六五直

郵便振替口座小樽 一四〇五九

北海道拓殖銀行本店 〇一七五九

北海道銀行本店 〇一四四四

発行人 八木健三

印刷 特急印刷株式会社